

「あおば米」の品質向上のため、コシヒカリの田植えは5月15日を中心に！

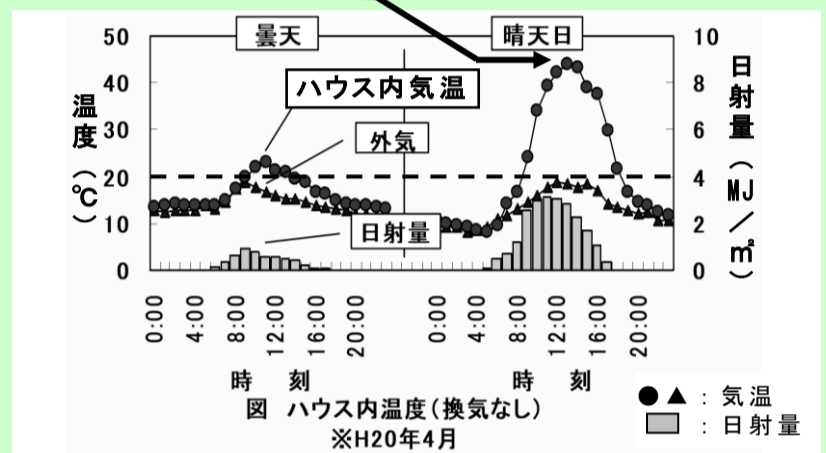
- ・苗が軟弱徒長にならないよう、育苗ハウスの換気を徹底する。
- ・田植機は70株／坪にセットし、適正な水管理で初期分けつの発生を促す。
- ・基肥は品種や土壌条件に合わせて適正量を施用し、適正生育へ誘導する。
- ・除草剤は使用前に必ずラベルを確認し、除草効果を高めるため遅れずに散布する。

1 硬化期の育苗管理

～換気を徹底して、健苗づくりに努める～

- 日中のハウス内の温度は20～25℃を目安に管理する。
(特に、晴天日は早朝から換気する)
- かん水は朝1回を原則とし、床土の乾きに応じてかん水する。(かん水過多は根張りが悪くなるので注意する)
- 田植え7～10日前からは、10℃以下の低温にならない限り、昼夜ともハウスを開けて苗を外気に慣らす。
- 強風の際はハウスの風下側を開けるなど、苗に直接風が当たらないよう注意する。

晴天日のハウス内の温度は
40℃を超える高温になる！



2 本田準備と病害虫防除

～田植えは代かきから5日以内に行う～

- 整地の良否は稲の生育や雑草の発生に大きく影響するため、耕起や代かきは丁寧に行い、田面の均平に努める。
- 代かきは田植えの3～5日前に実施する。また、代かきは少なめの水で行い、稲わらなどの埋没に努めるとともに、濁り水は排水路へ流さないように注意する。

JAでの購入苗は苗箱施薬施用済みのため、重ねて施用しないで下さい

<苗箱施薬>

～間違えて除草剤を苗箱に散布しないよう注意しましょう～

対象品種	主な対象病害虫	薬剤名	散布量	散布時期
全品種	いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イナゴ類、ツマグロヨコバイなど	ルーチンブライト 箱粒剤	50g/箱 (1kgで 苗箱20枚分)	は種時(覆土前) ～ 移植当日

☆播種前に散布機の日盛を調整し、適量が散布されているか確認する。

☆育苗終了後の育苗ハウスで野菜を作付けする場合、薬剤散布は育苗ハウスの外に搬出してから行う。

(播種時や育苗ハウス内で散布した場合、その後ハウス内で栽培した野菜に農薬残留するおそれがあります。)

3 斑点米カメムシ対策(第2回)

～斑点米カメムシが好む雑草を春から減らす～

- 斑点米カメムシ類は、主にイネ科雑草に生息することから、バスタ液剤やザクサ液剤などの除草剤を使用する場合、田植え前までに散布する。
※周辺の農用地や作物に飛散しないよう、散布方向・範囲に注意し、風のないときに散布する。
- 除草剤散布をしない場合は、幼虫の餌となるイネ科雑草が穂をつけないよう、こまめに草刈りを行う。

4 田植えと水管理

～適正な「植付け」「施肥量」「水管理」で初期分けつを確保～

- **栽植密度は70株／坪にセットし、植付本数は3～4本／株、植付深さは3cm**に調整する。
- **基肥は、品種や土壌条件などに応じた施肥基準量^{※1}を遵守**するとともに、田植時には施肥量の確認を必ず行う。
- **活着までは5～6cm程度のやや深水**にして植え傷みを防ぎ、田水温を確保する。
活着後は3cm程度の浅水にして、早朝に入水し、日中は止め水にして田水温を高める。

※1 JAあおば予約注文書兼肥料カタログの施肥設計例を参考にして下さい

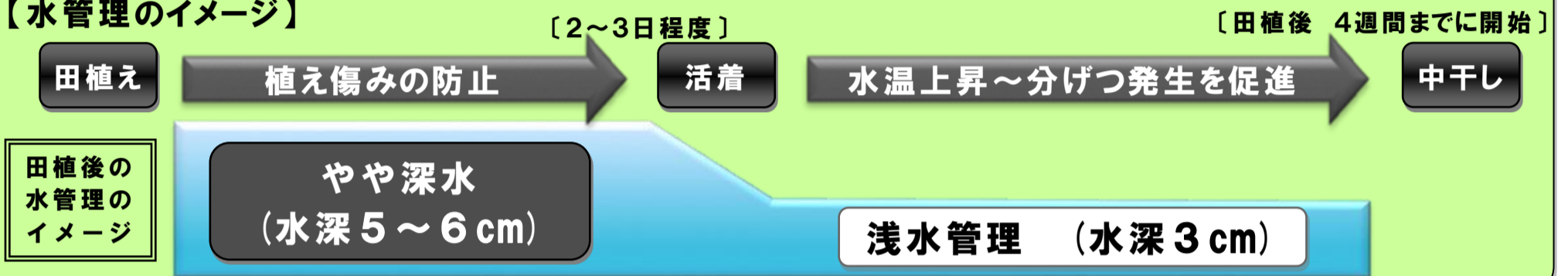


あらかじめ田植機の設定を確認しましょう。

⇒ 株数は70株/坪にセット、掻き取り量は標準よりも「少なく」、植付深さは「浅く」設定すると目標に近づきます。

田植え作業開始時には、目標どおりの植付となっているか確認し、田植え作業中は苗や肥料の使用量を確認しましょう。

【水管理のイメージ】

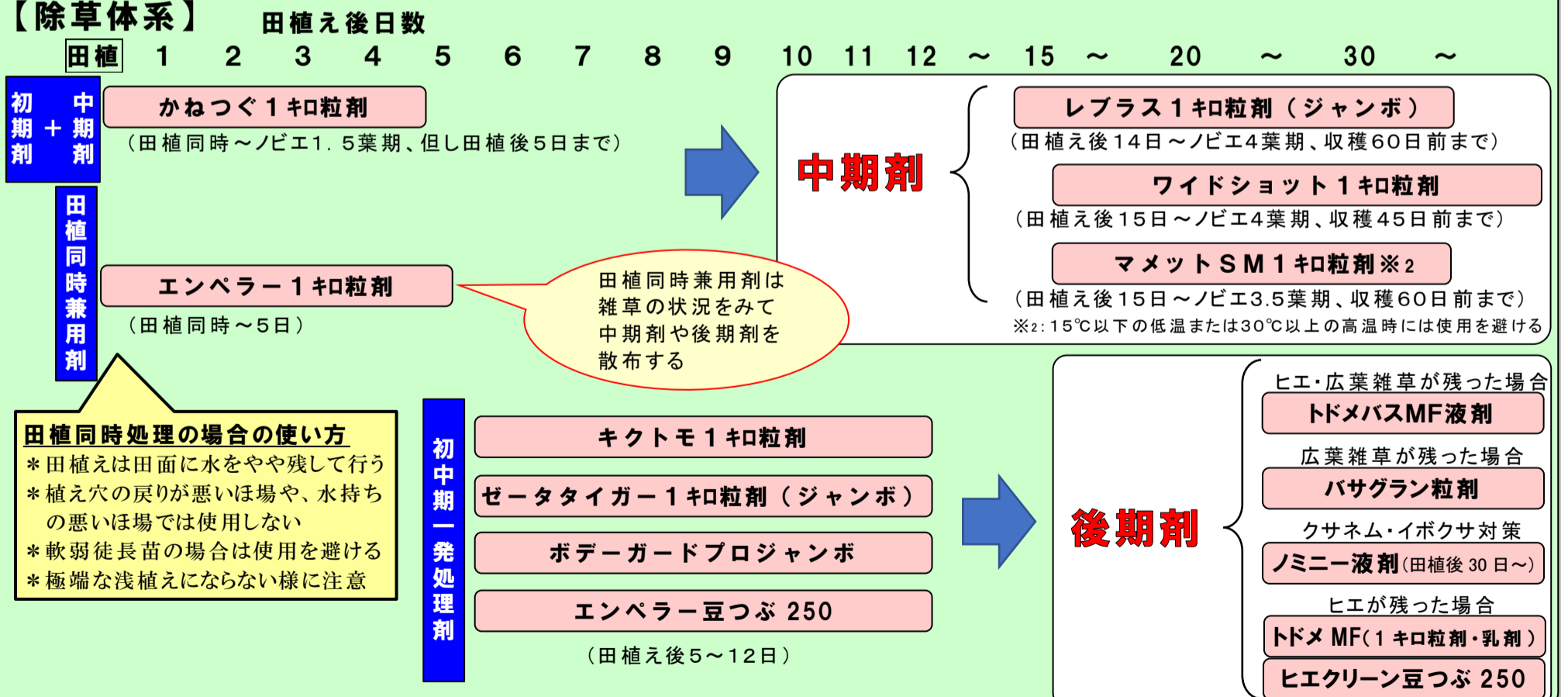


5 除草剤散布

～使用基準を遵守し、ムラなく均一に適期散布する～

- 除草剤の散布前に、畦畔や排水口からの漏水の有無を確認するとともに、漏水箇所を手直しする。
- 河川への農薬成分の流出を防ぐため、**散布後7日間は「止水管理」にして落水しない**。
- **散布後5日間は湛水状態**を保つ。
- 雑草が多いほ場は、「体系処理」で除草効果をさらに高めましょう。

【除草体系】



育苗や本田作業後は、忘れずに生産履歴簿へ作業内容を記入しましょう

「しめよう！シートベルト」春の農作業安全運動展開中！